

大成建設グループ

ゼロカーボンビル本運用

建材・舗装材 脱炭素加速 開発から実証まで

大成建設グループが埼玉県幸手市に開設した脱炭素関連の次世代技術研究所が、本格運用に入った。建築物のライフサイクル（LC）全体で排出される二酸化炭



ゼロカーボンビルの外観①と木造構造の4階ラウンジフロア

素（CO₂）について、実質収支ゼロとなる国内初の「ゼロカーボンビル」を目指す管理研究棟などで構成。敷地内で材料開発や製造、施工実証がワンストップで

完結できる環境を構築した。持続可能な建築・道路舗装関連インフラを実現するための脱炭素イノベーションを加速させる。16日に報道公開した。名称は「大成建設グループ次世代研究所『T-FIELD/S-ATTE』」。主に建築・舗装分野の脱炭素化を加速させる研究・実証拠点として、大成建設と大成ロテックが中心となって運営する。所在地は幸手市平須賀2480の13。首都圏中央連絡自動車道（圏央道）の幸手ICに近く、関東圏にある同社グループのさま

ざまな研究所や工場などで行き来しやすい。施設は▽ゼロカーボンビルを目指す管理研究棟▽コンクリート床版の疲労耐久性を検証する「道路床版のラボ」▽脱炭素や再生資材を活用した製造実験施設の「コンクリート・アスファルトの製造ラボ」▽製造した舗装材を検証する「道のテストフィールド」▽地域の生態系と調和する水辺環境・緑地空間などで構成する。

所として知られる幸手市の「幸手権現堂桜堤」を意識し、桜をモチーフにした木造のファサードを採用している。

大成建設の担当者によると、ゼロカーボンビルには計108の脱炭素関連の技術を活用。このうち8割程度はグループ独自の技術が占めるといふ。脱炭素にはCO₂を固定する木造の活用が最も影響が大きく、続いて脱炭素・低炭素化を推進する鋼材やコンクリートなどの活用も効果を上げる見込みという。

中心的役割を担うゼロカーボンビルの規模・構造はW・RC造4階建て延べ2724平方メートル。下層階の1、2階にCO₂削減や資源循環に有効なさまざまな建材を取り入れ、上層階の3、4階を主に地場の秩父産材を生かした木造としている。外装は関東屈指の桜名

大成建設の長島一郎常務執行役員技術センター長は、施設を最大限活用することで「当社グループが（建設業界の）先頭に立つて未来の標準を作り、持続可能な社会づくりに貢献したい」と展望している。

